

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (23)

龍馬には見せていなかったのかもわかりません。或いは、見せながらもそのことを記述していなかったとも考えられます。何れにしても、小龍は自分の学識と万次郎から得た知識を中心に、龍馬と語り合ったのであり、彼の思想は龍馬を満足させ、彼の人生に大きな影響を与えたこととなります。

■少ない完全写本としての「京都外語本」

小龍は容堂への献上本の他に原本を複数部作っていたものと思われる。また、宇高氏の見解では、容堂が大名たちに見せてからは、彼らのもとで書写されたものもあると見えています。小龍自身は版行する考えはなく、書写の希望も断っていたようです。しかし、妻は強い申し出に抗しきれず、謝礼を喜ぶ門人を使って夫に無断で書写させていたことが伝えられています。このことを小龍は感づいていたようですが、あえて咎めようとはしなかったそうで、同氏の調査では昭和六十一（1986）年までにアメリカに渡っていたものを含めて十一種が確認されています。その中で小龍の手稿本や古写本は本学図書館所蔵の所謂「京都外語本」を含めて八種となっています。また、原本は全四巻で成立していますが、調べられた中には五巻本もあり、挿絵が省略されたような形体の異なるものが作られていたことも判明しています。また、この写本類が基になって流布本や異本が作られていったことも確認されています。

このような中、同氏は「京都外語本」を古写本の内、他の三点と共に「紀略の成立以後間もなく作られたもの」として「完全写本」と位置付けています。このことについての細かい説明はありませんが、解説本で使われている原本の翻刻では、首巻の末尾に「嘉永五年歳次壬子冬 日 小梁処士 稿」と記載され、「みずのえのとしまわりのとうじつ」を表しています。「京都外語本」ではこの部分が「嘉永五年壬子嘉平月 小梁処士 稿」と、「みずのえ」の「ね」年の「かへいげつ」が表記されています。これは原本の表現が異なっていたものと思われるのですが、どちらも嘉永五（1852）年の十二月に原本が完成し

たことを示しています。この記述の違いは多くの雅号を使う小龍にとって、彼一流の洒落心であったのかもしれませんが。また、「京都外語本」は全巻を通じて見事な楷書体の筆致と綺麗な挿絵で構成されています。そこには厳密さと緊張感さえ窺われ、このようなことが「完全写本」と見えず根拠になっているものと思われます。

この書物の成立から百五十八年目となる現在、出版界やマスコミが龍馬の思想や行動を語る時には、原本に忠実な形をとる「京都外語本」が適しているのではないのでしょうか。

■京都府の事業に貢献して、この地に眠る

小龍は明治二十一（1888）年になると龍馬終焉の地である京都府の北垣国道知事から招請を受けて入洛し、歴史的大事業の記録『琵琶湖疎水図誌』を描き上げ、明治三十一（1898）年にこの地で亡くなりました。享年は75歳でした。

小龍が龍馬と出会ってから好んで用いるようになったとされる雅号「半舫斎」の「舫」は、「二艘並んだ船」を意味し、一艘を自分に例え、もう一艘は龍馬を表すそうです。⁵⁾小龍は龍馬の目指した近代化が実現していく過程を見届け、龍馬の墓がある京都霊山護国神社を東に望む衣笠山麓の等持院で静かに眠っています。

基本的な参考資料

- 川田維鶴 撰『漂異紀畧 付 研究 河田小龍とその時代』高知市民図書館 昭和61年。
- 琵琶湖疎水図誌刊行会 編『琵琶湖疎水図誌』東洋文化社 昭和53年。
- 『河田小龍 幕末土佐のハイカラ画人』高知県立美術館 編集・発行 平成15年。

註

- (1)宇高随生「解題」川田維鶴 撰『漂異紀畧 付 研究 河田小龍とその時代』所収126頁。
- (2)明治中期、小龍の門下で海援隊員の近藤長次郎藤陰の伝記が出版された時に、小龍が高知の新聞記者の問いに答えたもので、自分と龍馬との関係が述べられている。そこで小龍は龍馬との出会いの年が嘉永六年か七年と回想しており、今日の研究者によっても解釈が異なる。
- (3)北小路健「『船中八策』と『漂異紀畧』」川田維鶴 撰『漂異紀畧 付 研究 河田小龍とその時代』所収8-11頁。
- (4)宇高前掲132頁。
- (5)桑原恭子 著『龍馬を創った男 河田小龍』新人物往来社 1993年8頁。

おくまさよし（司書・事務長兼管理運営課長）